

蘇軾詩注解（十八）

山 本 和 義
 蔡 毅
 中 裕 史
 中 純 子
 原 田 直 枝
 西 岡 淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

西湖に小飲して欧陽叔弼兄弟を懷いて、趙景貺・陳履常に贈る（一八三〇）

蠟梅 一首、趙景貺に贈る（一八三一）

王竦朝散が闕に赴くを送る（一八三二）

致政張朝奉に次韻し、仍りて招きて晚飲せしむ（一八三三）

閻立本が職貢図（一八三四）

王滁州が寄せらるるに次韻す（一八三五）

趙景貺 詩を以て東齋の榜銘を求む。昨日 都下より酒を寄せ来たと聞き、戯れに其の韻に和す。一壺を分かちて潤筆と作さんことを求むるなり（一八三六）

一八三〇（施注三一—一八）

小飲西湖懷歐陽叔弼兄弟贈趙景貺陳履常

西湖に小飲してせいこ しょういん歐陽叔弼兄弟を懷いて、趙景貺・陳履常に贈るちやうけいきやう ちんりじやう おく

1 歲暮自急景

歲暮 自ら 急景
さいぼ おのすか きゆうけい

2 我閑方緩觴

我れ閑にして方に觴を緩うす
われ かん まさ さかすき ゆる

3 歡飲西湖晚

歡飲す 西湖の晩れ
かんいん せいこ

4 步轉北渚長

歩みは 北渚の長きに転ず
あゆ ほくしよ なが てん

5 地坐略少長

地坐 少長を略し
ちざ しょうちやうりやく

6 意行無澗岡

意行 澗岡無し
いこう かんこう なし

7 久知薺麥青

久しく薺麥の青きを知るも
ひさく せいばく あお

8 稍喜榆柳黃

稍る喜ぶ 榆柳の黄なるを
すこが よろこい ゆりやう き

9 盎盎春欲動

盎盎として春動かんと欲し
おうおう はるうご

10 激激夜未央

激激として夜未だ央ぎず
れんれん よるいま

11 水天鷗鷺靜

水天 鷗鷺靜かに
すいてん おうろ しず

- 12 月露松檜香
月露 しょうかい 松檜香る
13 撫景方春晚
景を撫して方に春晚
14 懷人重淒涼
人を懷いて重ねて淒涼
15 豈無一老兵
豈に一老兵の無からんや
16 坐念兩歐陽
坐ながら兩歐陽を念う
17 我意正麋鹿
我が意は正に麋鹿
18 君材亦珪璋
君が材は亦た珪璋
19 此會不可再
此の會 再びす可からず
20 此歡不可忘
此の歡 忘る可からず

○元祐六年（一〇九二）、五十六歳の作。知潁州として潁州にあった。

○小飲西湖 西湖は、潁州にあった湖。『蘇軾詩注解（十六）』に収める「西湖にて戯れに作る」詩を参照。施注によれば、詩題の「小飲西湖」は、王本では「竹間亭小酌」となっている。陳師道に「蘇公の竹間亭小酌に次韻す」詩（『後山集』巻二）がある。○歐陽叔弼兄弟 潁州でともに遊んだ歐陽棐（字は叔弼）が、礼部員外郎に任じられて都へ旅立ったことは、『蘇軾詩注解（十七）』に収める「新渡寺の席上……」詩を参照。その前に弟の歐陽辯（字は季默）もすでに都へ旅立っていたことは、『蘇軾詩注解（十六）』に収める「歐陽季默の闕に赴くを送る」詩を参照。○趙景貺・陳履常 趙令時（景貺はその字）と陳師道（履常はその字）については、『蘇軾詩注解（十二）』に収める「復た放魚の韻に次して……」詩の詩題の注を参照。

1 ○急景 せわしく暮れていくこと。鮑照「舞鶴の賦」（『文選』巻一四）に「是に於て窮陰殺節、急景凋年、涼沙野に振るい、箕風 天を動す」とある。白居易は「歲暮」詩（『白居易集箋校』巻一七）に「窮陰の急景 坐に相催し、

牡丹韶顔 去りて回らず」と、年の瀬に感じる時の流れの急なるに對する思いを詠じている。2〇緩觴 ゆっくりと酒を楽しむこと。謝靈運「魏の太子の鄴中の集いに擬する詩 八首」その三『文選』卷三〇の陳琳に擬した詩に「哀哇は梁埃を動かし、急觴は幽黙を盪う」とある「急觴」とは対照的に、ゆるりと杯を傾けることをいう。『四河入海』卷一一の一の韓智羽の聞書に「我ハヒマル身ナレバ、シツシツ觴ヲナガモチシテルゾ」とある。4〇北渚 『蘇軾詩注解（十七）』に収める「趙景貺が「春思」に次韻し……」詩に「明朝 北渚に游ばば、急に黃葉の徑を掃わん」とあるように、潁州において蘇軾が遊んだ西湖の北側の中洲をさす。5〇地坐 筵も数かず地に直接座ること。そこには劉伶の「酒徳の頌」（『文選』卷四七）にいう「天を幕とし地を席として、意の如く所を縦にす」の、天地の間を意の赴くままに行く奔放な境地が示されている。〇略少長 長幼の序にこだわらないこと。王羲之「蘭亭の序」『晉書』王羲之伝に「群賢畢く至り、少長咸な集まる」とある。6〇意行 意のままに赴くこと。蘇軾「潁州にして初めて子由に別る」詩『蘇東坡詩集』第二冊一〇五頁を参照。6〇潤岡 谷川や岡。韓愈「此の日惜しむ可きに足る 一首、張籍に贈る」詩『韓昌黎集』卷二に「道を仮りて盟津を経、出入して潤岡を行く」とある。7〇蕎麦青 韓愈「琴操 十首」の「猗蘭操」『韓昌黎集』卷一に「雪霜 質質として、蕎麦の茂きあり」とあるように、ナズナとムギは、秋冬に生い茂る。ここでは、蘇軾「魯元翰少卿が衛州に知たるを送る」詩『蘇東坡詩集』第四冊二七頁に「桃花 忽ち陰を成し、蕎麦 秀でて已に繁し、門を閉ざして春昼永く、惟だ黃蜂の喧しき有り」とあるのと同じく、春に青々と育っているさまを詠じている。8〇榆柳黄 ニレとヤナギの芽吹いているさま。陶淵明「園田の居に帰る 五首」その一『陶淵明集』卷二に「榆柳 後簷を蔭い、桃李 堂前に羅なる」とあり、榆柳には陶淵明の隱棲の境地に繋がるイメージがある。9〇盎盎一句 杜牧「李賀集の序」『樊川集』卷七に「春の盎盎として、其の和を為すに足らざるなり」とある。ここでの盎盎は、春の気があふれるさまをいう。杜甫「十二月一日 三首」その一『杜詩詳注』卷一四に「今朝臘月 春意動き、雲安泉前 江 憐れむ可し」とある。年の暮れにすでに春の気が動きだすさまをいう。10〇激激 春になって水が融け水かさが増して、水面にさざなみがたっているようす。楊夔「鄭谷を送る」詩『文苑英華』卷二八二に「春江激激として清く且つ急に、春雨濛濛として密

にして復た疎なり」とある。○夜未央 夜もまだ更けやらぬことをいう。『詩経』小雅「庭燎」に「夜や如何、夜未だ央ぎず、庭燎之れ光り、君子至りぬ」とある。11○水天一句 水天とは、蘇軾「前赤壁の賦」『蘇軾文集』巻二）に「白露 江に横たわり、水光 天に接す」とあるような、水面と天空が一つにつながった世界をいう。白居易「閑居して自ら題す」詩（『白居易集箋校』巻三〇）に「波閑かにして魚鼈戯れ、風静かにして鷗鷺下る、寂として城市の喧しき無く、渺として江湖の趣有り」とある。この一句は水面にたたずむ鷗も鷺も物音をたてることのない静寂な空間をいう。12○月露一句 月露は、蘇軾「十月十四日……」詩（『蘇軾詩注解（十五）』に「月華 稍る澄穆、露氣 尤も清薄」という、空にあふれる月のひかりと大気中の露の気をさす。松檜香は、蘇轍「子瞻の病中に虎跑泉の僧舎に遊ぶに次韻す 二首」その一（『欒城集』巻五）に「地を掃って門を開けば 松檜香り、僧家の長夏 亦た清涼」とある。静寂のなかに松檜が香るさまをいう。13○撫景 景観を愛しむさま。江淹「銅雀妓」『樂府詩集』巻三二）に「影を撫して従う無きを愴み、惟だ憂いの薄からざるを懷う」とある。○晚晚 老いゆくさま。陸機「歎逝の賦 并びに序」『文選』巻二六）に「時は飄忽として其れ將に及ばんとす」とあり、その李善の注に「晚晚は日の將に暮れんとするを言うなり」とある。14○懷人 遠くにいる人を慕い懷うこと。『詩経』周南「卷耳」に「嗟我れ人を懷いて、彼の周行に賓く」とある。ここでは詩題にある歐陽棐・歐陽辯兄弟と、趙令時・陳師道を思い遣ること。『四河入海』巻一一の一の一韓智羽の問書に「言（フココロ）ハ、カウ景ハ、面白ケレドモ、両欧・趙・陳ノ四人ガ此ノ座敷ニナイガ遺恨ゾ」とある。15○一老兵 酒を酌み交わす相手。『晉書』謝奕伝に「（桓）温に逼りて飲ましむ、（桓）温走りて南康主の門に入りて之を避く。……（謝）奕遂に酒を携えて聴事に就き、（桓）温の一兵帥を引いて共に飲みて曰く、「一老兵を失い、一老兵を得、亦た何の所在らん」と」とある。16○坐念一句 坐念はじっと念っている意。白居易「池上の作」詩（『白居易集箋校』巻三〇）に「泛然として独遊し邈然として坐す、坐念行心 古今を思う」とある。蘇軾「正輔表兄を追餞して博羅に至り……」詩（『合注』巻三九）に「我も亦た坐ながら高安の客を念じ、神は黄檗に遊びて洞山に参ず」とある。17○麋鹿 麋は、おおじか。在野の自由人をなぞらえる。蘇軾「孔文仲推官の贈らるるに次韻す」詩（『蘇東坡詩集』第二冊三七頁）に「我は本と麋鹿の性、

諒に輾に伏する姿に非ず」（姿は、資質）とある。18〇君材一句 珪璋は、光り輝く才能をさす。『詩経』大雅「卷阿」に「颯颯たり叩叩たり、圭の如く璋の如し」とある。『四河入海』の一韓智翊の聞書に「君ガ材ハ、朝廷ニ、アルベキ人ゾ。此モ亦（タ）字ヲ以テ欧陽兄弟ヲ云（フ）テ、サテ又（タ）陳・趙モト云（フ）心ガ有（ル）ゾ。此（ノ）人タチノ材ハ圭璋ノ如キゾ。朝廷ノ上ニヲライデカナウマイ人タチゾ」とあるように、欧陽兄弟をいうが、趙令時と陳師道が逸材であることを含む。1920〇此会・此歎二句 潁州において、欧陽兄弟や、趙令時・陳師道と過ごした日々を追想し、その歓楽は二度と味わえないがゆえに、忘れ得ぬものだという。李白「春 商州の裴使君に陪して石娥溪に遊ぶ」詩（『李太白全集』巻二〇）に「明発 東に首うの路、此の歎 焉くんぞ忘る可けんや」とある。

年の瀬はおのずと時の流れも急だが、閑なわたしはそんな中でもゆるりと杯を傾ける。夕暮れの西湖での酒宴を楽しみ、長く続く北の渚を散策する。筵も敷かぬ無礼講で、山といわず川といわず気の向くままに歩んでゆく。ナズナや麦が青くなっているのは前々から気づいていたが、榆や柳が黄色く芽吹こうとしているのに心が躍る。

大気が和んで春の気がぎざしはじめ、水かさを増した湖がさざ波立って夜はまだこれから。天空に連なる湖水には鷗と鷺が静まり、露の気を含んだ月光の中を松や檜の香がただよう。

この景観を愛でるわたしはまぎれもなく老境の身、若い欧陽兄弟を懷えはいっそうわびしさがつる。老いた飲み仲間がいなくてもないが、ここにふたりの欧陽兄弟がいてくれたらと思う。わたくしは山中に棲む鹿そのまま、かたやあなたがたは生まれつき玉のような才能をお持ちだ。その人たちと再び宴を共にすることは叶うまいが、あの楽しさを忘れることは決してないでしょう。

（担当 中 純子）

蠟梅一首贈趙景貺
蠟梅 一首、趙景貺に贈る

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|-------------------|--------------|--------------|--------------------|-----------------|--------------|--------------|----------|------|---------------|---------------|-----------------|---------------|-------------|---------------|
| 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 君行適吳我適越 | 我老不飲當付君 | 此閒風物屬詩人 | 夢裏花仙覓奇句 | 歸來却夢尋花去 | 夜閒梅香失醉眠 | 醉中不覺渡千山 | 玉蕊檀心兩奇絕 | 萬松嶺上黃千葉 | 君不見 | 我亦兒嬉作小詩 | 天工變化誰得知 | 取蠟爲花亦其物 | 蜜蜂採花作黃蠟 | 此有蠟梅禪老家 | 天工點酥作梅花 |
| 君は行くゆく呉に適き 我は越に適く | 我れ老いて飲まず 当に君に付すべし | 此の間の風物 詩人に属す | 夢裏に 花仙 奇句を覓む | 歸り来たりて却って夢に花を尋ね去れば | 夜 梅の香を聞いて 醉眠を失す | 醉中 覚えず 千山を渡る | 玉蕊檀心 両つながら奇絶 | 万松嶺上の黄千葉 | 君見すや | 我も亦た兒嬉して小詩を作る | 天工の变化 誰か知るを得ん | 臘を取って花と為すも亦た其の物 | 蜜蜂 花を採って黄臘と作す | 此に蠟梅有り 禪老が家 | 天工 酥を点じて梅花と作す |

16 笑指西湖作衣鉢

笑わらって西せいこ湖こを指さして衣いはつ鉢はつと作なさん

元祐六年（一〇九一）、五十六歳の作。

○蠟梅 『本草綱目』卷三六「蠟梅」に、「（李）時珍曰く、「此の物は本と梅の類に非ず。其の梅と時を同じくし、香りの又た相近く、色の蜜蠟に似たるに因りて、故に此の名を得たり」ととみえる。宋・王立之『王直方詩話』（『宋詩話全篇』第二冊）に、「蠟梅は、山谷初めて之を見て二絶を作る。……之に縁りて蠟梅は京師に盛んなり」とあるように、蠟梅が詩に詠じられるのは宋代以降のことで、黃庭堅を以てその先驅とする。『四河入海』（卷一四の三）に引く万里集九「天下白」に、「統翠云（フ）、梅卜時（ヨ）同（ジクス）、故（ニ）蠟梅（ト）曰（フナリ）。花（ハ）梅（ニ）似ズ、サシテ風騷モナキ花ナリ。尾州（ノ）妙興寺（ニ）在（リ）、ト」とあり、室町時代にはわが国に入ってきていたことが知られる。山本和義「芸報終刊に寄せて」（研文選書『理と詩情』所収）を参照。○趙景貺 趙令時のこと。景貺は字。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。

1○天工 『尚書』皋陶謨に、「庶官を曠むなしゅうする無かれ、天工は人其れ之に代わる」とあり、天のしわざをいう。「子由の「園中の草木を記す」に和す 十首」その三の注（『蘇東坡詩集』第一冊四九四頁）も参照。○点酥 酥は牛や羊の乳から作る乳製品。蘇軾は「泗州にて除夜の雪中に黃師是 酥酒を送らる 二首」その一（『合注』卷二四）に、「閑右の土酥 黄なること酒に似て、揚州の雲液は却って酥の如し」と詠じている。小川環樹注『蘇軾』下（中国詩人選集二集6）一〇頁の注を参照。宋・文同「杏を惜しむ」詩（『丹淵集』卷一二）に、「北園の山杏は皆な高株、新枝 花を放って酥を点ずるが如し」とある。2○禪老 禪寺の長老。「病中独り浄慈に遊び、本長老に謁す。…」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊一六頁）を参照。3○蠟 蜜蜂の巣からとった脂肪のかたまり。4○亦其物 『春秋左氏伝』莊公三十二年に、「（内史過）對こたえて曰く、「其の物を以て享せよ。其れ至るの日も亦た其の物なり」ととある。5○天工一句 杜甫「杜鵑行」（『杜詩詳注』卷一〇）に、「蒼天の変化 誰か料り得ん、万事 反覆 何の無き所ぞ」とあり、一句はこの前句を踏まえて詠じている。6○児嬉 子どもじみたたわむれ。韓愈「張道士を送る」詩

『韓昌黎集』巻八に、「又た笑語に媚びず、児嬉に伴う能わず」とある。7〇君不一句「君不見」に続く七字は、『蘇軾詩注解（十六）』に収める作品番号一八二二の詩の注を参照。黄千葉は蠟梅が一面に咲き誇るさまをいう。『蘇軾詩注解（十六）』に収める作品番号一八二二の詩の注を参照。8〇玉蕊 玉のように美しい花びら。〇檀心 花の中心部が淡紅色であることをいう。〇両奇絶 奇絶はたぐいなくすばらしいさま。李白「越女詞」その五（『李太白文集』巻二五）に、「新粧新波を蕩らし、光景 両つながら奇絶」とある。蘇軾は「柳子玉が「雪を喜ぶ」に和して次韻し、仍お述古に呈す」詩（『蘇東坡詩集』第三冊一八二頁）でも、「安くんぞ得ん 佳人の素手を擢で、笑って玉簪を捧げて両つながら奇絶にして」と詠じている。その注も参照。9 10 醉中・夜聞二句 一韓智羽の聞書に、「坡言（フココロ）ハ、我レ杭ヨリ穎ニ来（タル）ノ間、醉中ニ覚ヘズ千山ノ遠路ヲ渡（ル）ゾ、其（ノ）時、此ノ蠟梅ノ香ヲ聞キテ、アラ面白ヤト思ヒテ眠（ウ）モナウナルゾ」とある。いまこの解釈にしたがう。12 〇花仙 花をつかさどる神。陸龜蒙「襲美が「揚州に辛夷の花を見る」に和して次韻す」詩（『全唐詩』巻六二四）に、「柳疎らに梅墮ちて春叢少なし、天 花神を遣わして別に功を致さしむ」とある。13 〇此間一句「此間風物」は、ここでは杭州の方松嶺に咲き乱れる蠟梅をいう。蘇軾は「王晉卿が「梅花を送る」に和して次韻す」（『合注』巻三）に、「此の間の風物 君 未だ識らず、花浪 天に翻って 雪 相激す」と詠じている。15 〇君行一句 王注に引く趙次公注に、「先生將に会稽の請有らんとす」とあるが、蘇軾は知穎州の後、元祐七年二月に知揚州を拜命して同三月に着任している。また趙令時は、蘇軾が知揚州となった後も穎州に在って書信や詩のやりとりをしている。16 〇笑指一句「衣鉢」は師僧から弟子に伝える袈裟と托鉢。延いて弟子に伝える教えをいう。『蘇軾詩注解（四）』に収める作品番号一六二六の詩の注も参照。一句は、蘇軾がかつていくども詩に詠じた西湖を趙令時に託するゆえ、見事、詩を作って、覽ぜよと戯れを含んでいる。

天の造物のはたらきが酥を枝に点じて梅の花をお作りになりました。その蠟梅がここ長老の寺にあるのです。蜜蜂が花の蜜を吸って黄色の蠟を作ったのを、天が取って花にしつらえたものが他でもないこの蠟なのです。

天のはたらきは無尽であり料り知ることなどできませんが、わたしも子どもがいたずらするようにつまらぬ詩を作りました。

あなたはご存知でしょうか。万松嶺を一面の黄色に染める八重咲きの蠟梅の、玉のような花びらと淡い紅色をした花心とそのどちらもたぐいなく素晴らしいことを。酒に酔ううちに杭州から潁州まで幾重もの山を越えて来ましたが、夜に蠟梅の香りに気づくと酔いの眠気もどこへやら。潁州に来て夢の中で杭州に蠟梅を尋ねて出かけてみれば、花の神に面白い詩を詠めと求められるありさま。

こうした風雅は詩人ならではのいとなみです。でもわたしは老いてしまつて飲めないのだからあなたにお任せします。あなたはまもなく呉に行かれるだろうし、わたしは越に参ります。（わたしの愛した）西湖をあなたに伝える衣鉢だと笑つて指さしましょう。

（担当 中 裕史）

一八三一（施三一・二〇）

送王竦朝散赴闕

王竦朝散が闕に赴くを送る

1 我家衡山公*

我が家の衡山公

2 清而畏人知

清くして人の知ることを畏る

3 臧否不出口

臧否 口より出ださず

4 默識如著龜

默して識ること著龜の如し

5 擢子拱把中

子を拱把の中に擢てて

- 6 云有驥騄姿
 7 胡爲三十載
 8 尚作窮苦詞
 9 丈人不妄語
 10 未效此何疑
 11 竭來清潁上
 12 淚濕中郎詩
 13 怪我一年長
 14 而作十年衰
 15 同時幾人在
 16 豈敢怨白髭
 17 願君指松柏
 18 永與霜雪期
- 云う 驥騄の姿有り、と
 胡爲れぞ 三十載
 尚お窮苦の詞を作す
 丈人 妄に語らず
 未だ効あらざるも此に何ぞ疑わん
 竭來す 清潁の上
 涙は湿う 中郎が詩
 怪しむ 我の一年長じて
 而も十年の衰えを作すことを
 同時 幾人か 在る
 豈に敢えて白髭を怨みんや
 願わくは 君 松柏を指して
 永く霜雪と期せよ

〔原注〕 伯父爲衡山日、與君相知、有送行詩（伯父 衡山を爲むる日、君と相知りて、行くを送る詩有り）

元祐六年（一〇九一）五十六歳の作。

○王竦 伝未詳。○朝散 散官（役人の位を示す名目上の官名）の名。『宋史』職官志（卷一六九）に、從五品上の朝散大夫と從七品上の朝散郎とがみえる。○闕 宮廷の門の意で、借りて都をさす。

1 ○衡山公 蘇軾の伯父蘇渙（一〇〇一—一六一）のこと。鳳州司法、知鄜陵、利州路刑獄などを歴任し、嘉祐七年、

六十二歳で没した。衡山公の称は、自注に言うように蘇渙が知衡州（衡州の名は衡山に因む）の任に在ったことによる。蘇轍「伯父墓表」「變城集」卷二五を参照。2〇清而一句 晉の胡威は武帝に召され、自らの清廉潔白さは父の胡質と比較してどうかと問われて、「臣の父の清なるは人の知るを畏れ、臣の清なるは人の知らざるを畏る。是を以て如かざること遠し」と答えた『世說新語』德行篇の注に引く『晉陽秋』。「沈立之の留別に和す」その一の注『蘇東坡詩集』第二冊三六八頁を参照。3〇臧否一句 臧否は善し惡しを判定すること。『晉書』阮籍伝に「籍 礼教に拘らずと雖も、然るに言を発すること玄遠、口に人物を臧否せず」とある。4〇黙識 無言で認識する。『論語』述而篇に「黙して之を識し、学んで厭わず、人に誇えて倦まず」とある。〇著龜 占いに用いるめどぎ、筮竹と龜のこうら。先見の明があるもののたとえ。『周易』繫辭上伝に「頤を探り隠を索め、深きを鉤し遠きを致し、以て天下の吉凶を定め、天下の臺臺たるを成す者は、著龜よりも善きは莫し」とある。5〇拱把 拱は両手でひととかかえ、把は片手でひとにぎりほどの太さ。樹木がまだ成長していないことをいう。『孟子』告子上篇に「拱把の桐梓は、人苟くも之を生ぜんと欲せば、皆な之を養う所以の者を知る」とある。6〇驥騄 良馬のこと。赤驥と騄（緑）耳は、周の穆王の八駿の二つ（『穆天子伝』卷一）。『論衡』逢遇篇に「夫れ能く驥騄を御する者は、必ず王良なり」とある。ここでは蘇渙が年若い王竦の才能を讃えてかくいったこと。7〇三十載 蘇渙が没したのは嘉祐七（一〇六）二年で、時に利州路刑獄の任に在った。衡州はその直前の蘇渙の任地であり（原注と1句の注を参照）、この詩が作られたのは元祐六年（一〇九一）であるから、蘇渙と王竦の出会いはいはばこの三十年前といえる。8〇窮苦詞 苦しみのことば。王竦が不遇であることをいう。韓愈「荆潭唱和の詩の序」（『韓昌黎集』卷二〇）に「謹倫の辞は工みにし難くして、窮苦の言は好くし易し」とある。9〇丈人 徳の高い長老に対する敬称。「劉孝叔に寄す」詩の注『蘇東坡詩集』第三冊五五四頁を参照。〇妄語 でまかせを言う。『梁書』王遠伝に「卿 能く我をして一たび妄りに語らしむるを得れば、則ち卿に謝するに一縑を以てせん」とある。10〇未効 するしがあらわれない。蘇渙が王竦の才能を讃えた通にはまだなっていないこと。11〇竭来一句 竭来は去来に同じ。『史記』司馬相如伝に引く「大人の賦」に「車を回らして竭来し、不周より絶り、幽都に会食す」とある。ここでは来る意。潁は、潁水のこと。12〇涙湿一句 中

郎は次子の意で、蘇渙をさす。『晉書』謝道韞（王凝之の妻謝氏）伝に「二門の叔父は則ち阿大・中郎有り」とある。蘇軾「蘇廷評行狀」『蘇軾文集』卷一六に「次を渙と曰い、進士を以て官を得、至る所美称（びしう）有り」とある。一句について一韓智翊の聞書に「言（フココロ）ハ、王竦 潁州へ来（タ）ルガ、モト渙ガ衡州ヲ治（ムル）時、王竦ヲ送（リ）テ送行ノ詩ヲ作（ル）ゾ。其（ノ）詩ヲ王竦今持シ来（タリ）テ坡ニ示（ス）ゾ。サル程二坡之ヲ讀（ミ）テ涙ヲ濺（グ）ゾ」『四河入海』卷二二の二という。1718○願君・永与二句『論語』子罕篇に「歲寒くして、然る後に松柏の彫（しほ）むに後（おく）るを知るなり」とある。○「原注」詩題の注を参照。衡山を衡州に作るテキストがある。蘇渙が王竦を送った詩は現存しない。

我が伯父衡山公といえ、こころが清らかで人がそれを知るのを畏れるほどのお方。人の善し惡しを口になさらず、黙ってはいても先見の明をそなえておられた。

その伯父はあなたがまだ若木の頃から目をかけて、この子には駿馬となる素質があるとおっしゃった。どうしてあれから三十年の歲月を経て、なお苦しみの詩をうたっておられるのだらう。とはいえ、かの長老が妄りなことを言われるはずもなし、しるしが現れぬとて何の疑うことがあろうか。

そして今あなたはこの潁水の清流のほとりにやってきて、私は伯父が書いた詩を読んで涙することになった。私の方があなたより一歳年かさなだけなのに、まるであなたより十年も老いぼれているように見える。それでも同年代の何人が元氣でいるかを思えば、白いひげを怨むのもぜいたくというものだ。あなたはどうか松柏を手本として、霜雪のごとく清い高潔さをいつまでも保ち続けてください。

一八三三（施三一―二）

次韻致政張朝奉仍招晚飲

致政張朝奉に次韻し、仍りて招きて晩飲せしむ

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|----------|--------|-------|-------|----------|---------|---------|-------------|--------|-------|
| 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 儒臞謝赤松 | 習氣餘驚蛇 | 前生或草聖 | 疇昔一念差 | 我本三生人 | 猶事萼綠華* | 至今許玉斧 | 無窮走河車 | 自此養鉛鼎 | 火滅噴雨巴 | 雲蒸作霧楷 | 親授棗如瓜 | 曾經丹化米 | 未覺生有涯 | 怪君仁而壽 | 輕身豈胡麻 | 掃白非黃精 |
| 儒臞 | 習氣 | 前生 | 疇昔 | 我本 | 猶事 | 至今 | 無窮 | 自此 | 火滅 | 雲蒸 | 親授 | 曾經 | 未覺 | 怪君 | 輕身 | 掃白 |
| 赤松を謝し | 驚蛇を余す | 或いは草聖 | 一念差う | 三生の人 | 萼綠華 | 許玉斧 | 河車を走らしめん | 鉛鼎を養いて | 雨を噴く巴 | 霧を作す楷 | 瓜の如きを授かる | 米を化すを經て | 涯に涯り有るを | 君の仁にして寿ながきを | 胡麻ならんや | 黄精に非ず |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |

- 18 佛縛慙丹霞 仏縛 丹霞に慙す
 19 時時一篇出 時時 一篇出だせば
 20 擾擾四座譁 擾擾として四座譁し
 21 清詩得可驚 清詩 得て驚く可し
 22 信美辭多夸 信に美なれども辭に夸多し
 23 回車入官府 車を回らして官府に入らば
 24 治具隨貧家 治具 貧家に随わん
 25 萍螯與豆粥 萍螯と豆粥と
 26 亦可成咄嗟 亦た咄嗟に成す可し

〔原注〕君曾見永州何仙姑、得藥餌之、人疑其以此壽也、故有丹化米、萼綠華之句、皆女仙事（君曾
 て永州の何仙姑に見え、藥を得て之を餌らう。人 其の此を以て寿ながきかと疑うなり。故に「丹の米
 と化する」、「萼綠華」の句有り。皆女仙の事なり）

○元祐六年（一〇九二）五十六歳の作。

○致政 致仕する、退官する。政務を君主に還す意。『礼記』王制に「五十にして爵す。六十は親ら字ばず。七十は
 政を致す」とある。○張朝奉 伝不詳。朝奉は散官（二頁参照）の名。『宋史』職官志（卷一六九）に、正五品
 の朝奉大夫と正六品上の朝奉郎とがみえる。

1 ○掃白一句 掃白は、白髪をなくして若返ること。黄精は薬草の名。長生の効があるとされた。和名ナルコユリ。
 「峽に入る」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊四七頁）を参照。一句は、杜甫「丈人山」詩（『杜詩詳注』卷一〇）に「白

髪を掃除するに黄精在り、君看よ 他時 氷雪の容を」とあるのを用いる。2〇輕身一句 胡麻はゴマのこと。1句の黄精と同じく長生の効があるとされた。『太平御覽』卷九八九に引く『神農本草經』に、胡麻の効能を説いて、「久しく服すれば身を軽くして老いず」という。3〇仁而寿 『論語』雍也篇に「知者は楽しみ、仁者は寿ながし」とある。4〇生有涯 人生には限りがある。『陳海州が「乗槎亭」に次韻す』詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊四〇八頁）を参照。5〇丹化米 仙女麻姑の故事。仙人王遠の弟子蔡經の家に降臨した麻姑が、穢れを祓うために米粒を地面に撒くと、それらは悉く丹砂になった（『太平広記』卷七に引く『神仙伝』王遠）。以下12句までは、張朝奉が何仙姑から教えを受けたことを承ける（原注を参照）。6〇棗如瓜 漢の方士李少君が武帝に神仙を説いたとき、「臣嘗て海上に遊びて、安期生に見ゆ。臣に棗の大きいさ瓜の如きを食らわしむ」と言った（『史記』孝武本紀）。7〇雲蒸一句 後漢の張楷は道術を好み、五里の霧を作ることができた。関西の裴優は三里の霧を作ることができたが、張楷には及ばないと自ら思つて楷に学ぼうとしたが、楷はこれを避けたという（『後漢書』張楷伝）。8〇火滅一句 後漢の欒巴は徴せられて尚書郎となり、元日の宴会で酒を賜ったとき、口に含んで西南の方に向かってプツと噴いた（嚔）。これを咎められた欒巴は、「郷里の成都の市中に火の手が上がるのを見たので消そうとしたのです」と答えた。早馬を立てて照会してみると、実際に成都では元旦に火事があったが、東北より雨が三たび降り来たて火は収まっており、その雨は酒気を含んでいたという（『太平広記』卷一一に引く『神仙伝』欒巴）。9〇養鉛鼎 道教の煉丹術で、鉛や水銀（汞）を鼎（丹鼎）で煉つて仙薬を得ることをいう。『抱朴子』内篇卷四（金丹）に「菓子長の丹法」として「曾青・鉛丹を以て汞及び丹砂に合わせ、銅箒中に著え、乾瓦・白滑石もて之を封じ、白砂中に於て之を蒸すこと八十日、小豆の如きを服すれば、三年にして仙たり」と説かれるのが、その例。10〇無窮一句 瑞溪周鳳は「蓋シ言フココロハ、血脈ノ運転スルコト猶ホ河流レテ尽キズ、車転ジテ止マラザルガ如シ」（『四河入海』卷一一の一）という。道教の養生法の一つで、河車（水車の一つ）が水を汲みあげて田畑に灌漑するように、運動・呼吸によって身中に血液を行きわたらす「搬運の法」のこと。「王頤 建州の錢監に赴き、詩及び草書を求む」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一八頁）を参照。11 12〇至今・猶事二句 許玉斧は、東晉・陶弘景『真誥』の記録者の一人である許謏のこと。同書は茅

山（江蘇省）に降臨した真人たちの言葉などを、靈媒の楊義と許謫・許翽親子とが記録し、後に陶弘景が蒐集・編集したもの。許翽は、字を道翔、小名を玉斧といい、若くして郡に挙げられたが赴かず、山中に居して修行に励んだという（『真誥』卷二〇）。萼緑華は、『真誥』（卷一）に見える女仙の名。歳は二十前後で顔立ちがきわめて整っており、羊權の居宅に降臨して尸解のための薬を与えた。もとは九疑山（湖南省）で道を得た羅郁なる女性であったという。ここでは道教の修行者であった許玉斧を張朝奉に、女仙の萼緑華を何仙姑に喩える。原注を参照。13 14 ○我本・疇昔二句 三生は仏教で前生（世）・現生・来生を指す場合が多いが、ここでは蘇軾がこれまで三たび生まれ変わっていることをいう。施注に引く唐・劉焯『樹萱録』によれば、ある省郎（天子の侍従）が夢の中で香を焚く老僧から「此れは是れ檀越結願の香なり。煙存して檀越已に三生たり。第一の生は玄宗の時に劍南安撫巡官と為り、第二の生は憲宗の時に西蜀書記と為る。第三の生は即ち今生なり」と言われたという。疇昔は、往昔、むかし。一念は、ひとつの想念、情念。一句は「芙蓉城」詩（『蘇東坡詩集』第四冊四九四頁）に、仙界にとどまらなかった仙女周瑤英をうたって「往来 三世、空しく形を鍊す、竟に誤って黃庭経を読むに坐す」というのに発想が似る。15 16 ○前生・習氣二句 前生は、仏教でこの世に生まれてくる前の世のこと。前世。草聖は、草書の聖人。唐の張旭をさす。「清平鎮自り樓観・五郡・大秦……、授経台」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五二三頁）を参照。習氣は、習慣、くせ。もとは仏教で消えずに残る煩惱のこと。じっけ。「錢越州に次韻す」詩（『蘇軾詩注解（三）』）の注を参照。驚いた蛇。驚蛇入草は、驚いた蛇が草むらに逃げ込むようすをいい、書道で筆遣いが生き生きして勢いがあることを喩える。『宣和書譜』卷一九、唐・積垂樓の項に引かれる張旭（張顛）の語に、「吾が書は大ならず小ならず、其の中道を得たり。飛鳥の林を出で、驚蛇の草に入るが若し」とある。17 ○儒臞「漢書」司馬相如伝（下）に「相如以為えらく、列仙の儒は、山沢の間に居り、形容甚だ臞せたり。此れ帝王の僊の意に非ざるなり」とあり、顔師古の注に「儒は、柔なり。術士の称なり。凡そ道術有るものは、皆な儒と為す」とある（これには異説もある）。これに従えば、仙人の瘦せたものの意。瑞溪周鳳は「蓋シ坡ノ言フココロハ、我レ山沢ノ臞儒ト為リテ赤松子ニ随ハントヲ欲セズ」と解する。○赤松 赤松子は古の仙人の名。「歐陽公に陪して西湖に燕す」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一一六頁）を参照。

18〇仏縛 仏の道にとらわれて悟りを得られないこと。王注は『維摩經』文殊師利問疾品（『大正藏』第一四卷）の「禪味に貪著するは、是れ菩薩の縛なり」を引く。○丹霞 唐の禪僧、丹霞天然のこと。「丹霞燒仏」の公案がある。嚴寒の慧林寺（洛陽）で丹霞が木仏を焼いたところ、これを譏める人があったので、丹霞は「舍利を取るのだ」と言ったが、「木（の仏）に何があるか」と返されたので、「ならばなぜ私を責めるのか」と答えたという（『景德伝燈録』卷一四）。1920〇時時・擾擾二句 擾擾は騒ぎ乱れるさま。四座は並みいるすべての人々。「九月十五日、月を観て琴を西湖に聴きて坐客に示す」詩（『蘇軾詩注解』十三）を参照。一韓智㮮の聞書に、「坡（ガ）言（フココロ）ハ、ナニサマ我が詩ヲ作レバ、人ガア、ト云（ヒ）テ面白ガルゾ」という。21〇清詩 清らかな詩。さっぱりした詩。他人の詩を賞賛していうことが多い。「文与可が出でて陵州に守たるを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊五八頁）、「再び徑山に遊ぶ」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊一〇五頁）を参照。22〇信美 王粲「登樓の賦」（『文選』卷一一）に「信に美なりと雖も吾が土に非ず、曾ち何ぞ以て少くも留まるに足らん」とある。○夸 誇に同じ。ここでは張朝奉が蘇軾の詩書を誇大に賞めること。一韓智㮮の聞書に「言（フココロ）ハ、サテ朝奉ドノガ詩ハ面白（ウ）テ人ヲ驚（カ）スガ、ナニモシヨウハボウラナル（法螺なる）誇大な」事ガ多（イ）ゾ。ナゼニト云ヘバ、我が詩ト書トノベシデモナイ（別しても無い）たいしたこともない）ヲ、ツヨク御ホメアル事ガ分ニ過（ギ）テ有（ル）程ニゾ」という。23〇回車一句 回車は、車の向きを転ずること。『楚辭』「離騷」に「朕が車を回らして以て路を復し、行迷の未だ遠からざるに及ばん」とある。官府は蘇軾が身を置く役所のこと。張朝奉が既に退官していることから、『後漢書』逸民伝の龐公の伝に「未だ嘗て城府に入らず」とあるをふまえて「官府に入らば」というのであろう。24〇治具 接待の準備をする。具は酒食の道具のこと。『史記』灌夫伝に「魏其夫妻治具して、旦自今に至るまで、未だ敢えて食を嘗めず」とある。2526〇萍螯・豆粥二句 萍螯は、ウキクサのなます。豆粥は、まめがゆ。咄嗟は、あつという間に。『世説新語』汰侈篇に「石崇 客の為に豆粥を作るに、咄嗟にして便ち辦ず。恒に冬天にも韭萍螯を得たり」（萍は萍と同義）とある。○「原注」丹化米は、5句の注を参照。萼綠華は、1112句の注を参照。

黄精を食して白髪を黒くなさったのでもなく、胡麻を食して身を軽くされたのでもない。不思議にもあなた

は仁徳があつてご長寿で、人生に限りがあるなどとは思えないほどだ。

そのかみ丹砂を米と化す術を身につけて、瓜のように大きな棗を親しく授かったとか。ある時は張楷のように雲を蒸して五里の霧を生じ、ある時は欒巴のように酒を噴いて遠方の火事を消す。これから煉丹の法をお修めになれば、川から水をくみ上げる水車のようにいつまでも血のめぐりがよろしいでしょう。あたかもあの許玉斧が、今に至るまで萼緑華に仕えているかのようです。

私はもともと三たび生まれ変わった者ですが、その前世のわずかな思い違いからこうなってしまったのです。前世ではあるいは草書の名人でもあったでしょうか。蛇が驚いて（草むらに）逃げ入るような勢いの書が、今も習いとなって遺っています。私はやせた仙人となって赤松子についていこうとは思いませんし、また仏の教えに縛られているようでは、仏像を焼いた丹霞禪師にもなれそうにありません。折にふれ一篇の詩を作って取りいざせば、満座のみなが、ああだこうだと喧しいこと。あなたの清々しい詩はまことに読む者を驚かせ、その詩句はなんとも美しくありますけれど、（私への）お褒めのことが多すぎます。

（これから）車を廻らせて私めの役所にお運びになれば、貧しい暮らしなりにおもてなしをいたしましょう。浮き草のなまずでも豆粥でも、たちどころに準備してさしあげます。

（担当 西岡 淳）

一八三四（施三一―三二）

閻立本職貢圖

閻立本が職貢図

1 貞観之徳來萬邦

貞観の徳 万邦を來たらしめ

- 2 浩如滄海吞河江 浩こうとして滄海そうかいの河江かこうを呑むが如しごと
- 3 音容儵服奇彪 音容おんよう 儵そうどうとして 服ふく 奇彪きぼう
- 4 橫絕嶺海逾濤瀧 嶺海れいかいを横絶おうぜつして濤瀧とうらんを逾こ
- 5 珍禽瑰產爭牽扛 珍禽ちんきん 瑰產かいさん 争あらそって牽扛けんこうし
- 6 名王解辮却蓋幢 名王めいおう 辮べんを解といて 蓋幢がいどうを却しりぞく
- 7 粉本遺墨開明窗 粉本ふんぼんの遺墨いぼく 明窓めいそうに開ひらく
- 8 我唱而作心未降 我われ唱きして作たって 心未こころいまだ降くだらず
- 9 魏徵封倫恨不雙 魏徵ぎあう 封倫ほうりん 双そうせざるを恨うらむ

元祐七年（一一〇九二）、五十七歳の作。

○閣立本 唐初、右相にまで任じられた官僚（？―六七二）。雍州万年（陝西省）の人。画家として有名で、特に人物画に長じ、唐の太宗や凌煙閣功臣の画像を描いた。『新唐書』卷一〇〇に伝がある。○職貢図 諸国の使節が朝貢に訪れたときのさまを描いた絵図。職貢は、みつぎもの。宋・史繩祖『学齋佔畢』卷二によれば、古くは梁元帝時の蕭繹に「貢職図」があり（北宋の模写本は現在南京博物院が所蔵）、蘇軾が見たのは、閣立本が東蛮謝元深の来朝を描いた「王会図」、または西域諸国の様相を描いた「西域図」であった可能性があらう。

1 貞観一句 貞観は、唐の太宗の年号。「貞観之徳」は、「貞観の治」の太平をもたらしした皇帝の徳のこと。太宗は英明で、賢臣魏徴らを用いたその治世は太平であったので、時の年号を取って称える。万邦は、多くの国々。『尚書』堯典に「百姓昭明にして、万邦を協和す」とある。2 浩如一句 晉・孫綽「望海の賦」（『藝文類聚』卷八）に「河を抱きて済を含み、淮を呑みて泗を納る」とある。3 音容一句 音容は、こえとすがた。謝靈運「従弟恵連に酬ゆ」詩（『文選』卷二五）に「巖壑に耳目を寓せ、歓愛も音容を隔つ」とある。儵儵は、粗野なさま。儵儵に同じ。劉禹

錫「興元李司空を祭る文」(『劉賓客文集』外集卷一〇)に「夷風は儼儼にして、獯俗は悍害なり」とある。奇彪は、奇怪で色が純一でないさま。『春秋左氏伝』閔公二年に「之に龙服を衣するは、其の躬を遠ざくるなり」(龙は彪と同義)とあり、杜預の注に「彪は、雉色なり」とある。4〇横絶一句 横絶は、川や山や海を横切り渡る意。『史記』留侯世家に引く劉邦の歌に「鴻鵠高く飛びて、一挙にして千里、羽翮已に就りて、四海を横絶す、四海を横絶す、当に奈何す可き」とある。濤瀾は、大きな波。韓愈「潮州の刺史の上に謝する表」(『韓昌黎集』卷三九)に「海口を過ぎ、惡水を下れば、濤瀾壮猛にして、程期を計り難し、颶風鰐魚、患禍測られず」とある。5〇珍禽一句 珍禽は、珍しい鳥の類。瑰産は、貴重な物産。牽は引く、扛は担ぐこと。6〇名王一句 名王は、匈奴の王のうち、特に位の高い王。『漢書』宣帝紀(神爵二年)に「匈奴の单于は名王をして奉獻して正月を賀せしめ、始めて和親す」とあり、顔師古の注に「名王は、大名有るを以て諸小王と別かつを謂う」とある。解辮は、辮髪(編んだ髪)を解きほく。異民族の人々が辮髪を解いて王の徳化に従うことをいう。『漢書』終軍伝に「始ど将に編髪を解き、左衽を削り、冠帯を襲い、衣裳を要めて、化を蒙る者有らんとす」とある。梁・丘遲「陳伯之に与うる書」(『文選』卷四三)に「当今皇帝聖明にして、天下は安樂なり。白環は西より献じ、桔矢は東より来たる。夜郎・滇池は辮を解きて職を請い、朝鮮・昌海は角を解して化を受く」とある。また、唐・崔鉉「宣宗が河湟を収復するに進むる詩」(『全唐詩』卷五四七)に「右地の名王は争って辮を解き、遠方の戎壘は尽く戈を投ぐ」とある。蓋幘は、車の傘と旗。晉・潘岳「馬汧督の誄」(『文選』卷五七)の序に「聖朝疇咨し、進むるに顕秩を以てし、殊にするに幘蓋の制を以てす」とあり、李善注に「幘蓋は將軍・刺史の儀なり」とある。ここでは朝貢に来た王たちが遠慮をして儀仗を辞退する(却)ことをいう。一句は唐王朝の勢威を詠ずる。7〇粉本一句 粉本は、下絵・画稿のこと。唐・韓偓「商山の道中」詩(『全唐詩』卷六八二)に「却って憶う 往年 粉本を看るを、始めて知る 名画に工夫有るを」とある。一句はいわゆる閭立本の職貢図を見る様子をつたう。8〇我喟一句 喟は、慨嘆すること。作は、立ち上がること。『論語』鄉党篇に「三たび喫ぎて作つ」とある。降は、心が落ち着くこと。『詩経』小雅「出車」に「既に君子を見れば、我が心則ち降らん」とあり、孔穎達疏に「我が心の憂えは即ち下れり」とある。杜甫「季秋、蘇五弟纓 江樓にて 夜 崔十三評事・韋少府姪

を宴す 三首」〔『杜詩詳注』巻二〇〕その二に「（たうたう）尽く憐れむ 君が酔倒するを、更に覚ゆ 片心の降るを」とある。
 9〇魏徵一句 魏徵は、唐初の名臣、字は玄成。直言をもって唐の太宗を諫めること二百余回に及び、鄭国公に封じられた。封倫も、唐初の大臣、字は德彝。太宗の時、尚書右僕射に任じた。太宗は乱世の後をいかに治めるべきかと魏徵に問い、その仁政を行うべきとの助言を受け入れようとする、封倫がそれは書生の空論だと反対した。その後太宗は魏徵の意見に基づいて唐をよく治めたが、封倫はすでにこの世を去っていたため、「惜しむらくは封德彝をして之を見しめざることを」と言った〔『新唐書』魏徵伝〕。

貞観の徳政に多くの国々が引き寄せられ、その勢いはまるで海が川を呑み込むようだった。奇怪な言葉をつかい異様な容貌で風変わりな服装を身に着けた人々が、けわしい山々と浪だつ海を越えて、珍しい鳥や奇異な物産を争って運び、名だたる大王たちも辮髪をほだいて儀仗の車蓋や旗を遠慮した。

その有様を写した模本の墨跡が明るい窓辺で広げられると、私は感嘆して立ち上がり、心はどうも落ち着かず、魏徵と封倫がそろって太平の世の実現を見られなかったことを残念に思うのだ。

（担当 蔡毅）

一八三五（施三一―三三）

次韻王滁州見寄

おうじよしゆう よ
 王滁州が寄せらるるに次韻す

- | | | |
|---|---------|---|
| 1 | 斯人何似似春雨 | 斯 <small>（こ）</small> 人 <small>（ひと）</small> 何 <small>（なに）</small> に <small>（に）</small> 似 <small>（に）</small> たる 春雨 <small>（しゆんう）</small> に <small>（に）</small> 似 <small>（に）</small> たり |
| 2 | 歌舞農夫怨行路 | 農夫 <small>（のうふ）</small> を歌舞 <small>（かぶ）</small> せしめて 行路 <small>（こうろ）</small> を怨 <small>（うら）</small> ましむ |
| 3 | 君看永叔與元之 | 君看 <small>（きみみ）</small> よ 永叔 <small>（えいしゆく）</small> と元之 <small>（げんし）</small> |

- 4 坎軻の一生 口語に遭う
 5 兩翁當年鬢未絲
 6 玉堂揮翰手如飛
 7 教得滁人解吟詠
 8 至今里巷嘲輕肥
 9 君家聯翩盡卿相
 10 獨來坐嘯溪山上
 11 笑捐浮利一雞肋
 12 多取清名幾熊掌
 13 丈夫自重貴難售
 14 兩翁今與青山久
 15 後來太守更風流
 16 要伴前人作詩瘦
 17 我倦承明苦求出
 18 到處遺蹤尋六一
 19 憑君試與問琅邪
 20 許我來游莫難色
- 元祐六年（一〇九二）、五十六歳の作。
- 坎軻の一生 口語に遭う
 兩翁當年 鬢未だ糸ならざるに
 玉堂に翰を揮って 手 飛ぶが如し
 滁人を教え得て解く吟詠せしめ
 今に至るまで 里巷 輕肥を嘲ける
 君が家は聯翩として 尽く卿相たるに
 獨り來たつて坐嘯す 溪山の上
 笑つて浮利を捐す 一雞肋
 多く清名を取る 幾熊掌ぞ
 丈夫自ら重んじて 售られ難きを貴び
 兩翁 今 青山と久し
 後來の太守は更に風流
 前人に伴つて詩を作つて 瘦せんことを要す
 我れ承明に倦んで 苦んでんことを求め
 到處 遺蹤 六一を尋ぬ
 君に憑つて 試みに与に琅邪に問う
 我が來たりて 遊ぶことを許して 難む色莫からんか、と

○王滁州 おうしやう 王詔字は景猷けいけんのこと。真定（河北省）の人。『宋史』卷二六六に伝がある。本詩の9句にも詠じられるように、祖父、伯父、父と続けて高官を出した家系に因み、蔭をもって官に補されるという恵まれたスタートを切り、工部尚書で致仕し、七十九歳で卒した。知事として滁州（安徽省）に在った時に、蘇軾に「醉翁亭の碑」を書することを請うたことがあり、崇寧年間（一一二一—一一二六）に至って、そのことで咎められた（『宋史』）。王詔の原詩は、未詳。

1 ○斯人 その人が、そういう人が、と取り立てて強調する語。『論語』雍也篇に、病に伏せている弟子の冉伯牛の手をとって、孔子が、「命めいなるかな、斯の人にして而も斯の疾やまい有るや、斯の人にして而も斯の疾有るや」と嘆じたという話が見える。冉伯牛は、孔子が、德行にすぐれた弟子四人のうちの一人に挙げた人物で（『論語』先進篇）、「斯の人」は、伯牛のように德行厚い、その人が、という含意がある。一句の「斯人」も、この故事を踏まえる。2 ○歌舞一句 歌舞は、歌い踊る。喜ぶさまをいう。『詩経』小雅「車牽」に「徳女なんじょと与ともにする無しと雖も、式しきて歌い式しきて舞う」とあり、鄭玄の箋に「歌舞して相樂しむ、喜びの至りなり」とある。行路は、道を行く人、旅人。一句は、1句の「春雨」が、耕作をする農夫からは恵みの雨として歓迎され感謝される反面、旅人からは道行きを困難にするものとして恨まれることを述べて、それと同じように、人も、どんなに德行厚い人物であろうと、一部のそれを喜ばぬ人々からは忌避されることを暗示している。3句以降で詠じる欧陽修・王禹偁の事跡への伏線となっている。3 4 ○君看・坎軻二句 永叔は、欧陽修のこと。永叔はその字。慶曆五年（一一〇四）八月に知滁州を命じられた（『資治通鑑長編』卷一五七）。時に三十九歳であった。欧陽修「滁州醉翁亭の記に題す」詩（『欧陽文忠公文集』卷五三）に「四十 未だ老いと為さざるに、醉翁 偶たまたま篇に題す」とあり、滁州在任中に、欧陽修が醉翁と号するようになったことが知られる。元之は、王禹偁（九五四—一〇〇一）のこと。元之はその字。『宋史』卷二九三に伝がある。至道元年（九九五）五月に、知滁州を命じられた（『資治通鑑長編』卷三七）。時に四十二歳であった。蘇軾は「王元之が画像の賛並びに叙」（『蘇軾文集』卷二）を著して、「故の翰林の王公元之は、雄文直道を以て、独り当世に立ち、漢の汲黯、蕭望之等の列に並び君子だと述べている。滁州の瑯琊寺に、欧陽修や王禹偁を記念する四賢堂があったという（『方輿勝覽』卷四七「滁州」）。坎軻は、不遇なこと。口語は、誹謗。楊惲「孫会宗に報ずる書」（『文選』

卷四一）に「遂に变故に遭い、横いままに口語を被る」とあり、李善の注に「口語は、即ち戴長樂の告ぐる所なり」とある。王禹偁は、右拾遺や翰林学士などを歴任する一方、滁州や黄州など地方へ三度左遷された。また、欧陽修は、長く大官の任に在り、枢密副使、参知政事と位を極めるも、晩年は穎州に隠棲することになった。子の欧陽発らによる「先公の事跡」には「先公は平生 直道を以て群小に忌まれ、再び貶逐を被るも、而も未だ嘗て以て意に介さず」と記される。二句は、かつて知事として滁州に赴任したことがある欧陽修と王禹偁が、官途に在って絶えず苦難を経験し続けたことを述べている。56〇両翁・玉堂二句 当年は、当時 賢未糸は、賢の毛がまだ白くなっていないこと、すなわち、まだ老いていないことを言う。白居易「悲哉行」（『白居易集箋校』卷一）に「縦い宦に達する者有るも、両賢已に糸を成す」。3句の注に見えるとおり、欧陽修は三十九歳、王禹偁は四十二歳で知滁州となった。玉堂は、翰林院の別称。蘇軾「次韻して錢穆父に答う。穆父 僕の汝陰を得たるを以て……」詩（『蘇軾詩注解（十四）』）に収める作品番号一八〇五の詩）の注を参照。二句は、欧陽修と王禹偁が若くして都で翰林学士としての文才を発揮したことを詠じる。78〇教得・至今二句 7句は、劉禹錫「東陽の干令が涵碧園（の詩）に答う 詩并びに引」（『劉賓客文集』卷二五）に「邦人を化し得て解く吟詠せしむ、如今の県令亦た風流」とある表現を踏まえていよう。輕肥は、輕い衣に、肉づきのよい馬。輕裘肥馬の略。贅沢のさまをいう。『論語』雍也篇に、孔子の弟子の公西赤が豪奢に着飾ったさまについて、「赤の斉に之くや、肥馬に乗り、輕裘を衣る」とある。杜甫「秋興 八首」その三「杜詩詳注」卷一七）に「同学の少年 多くは賤しからず、五陵の衣馬は自ずから輕肥」とある。二句は、前の56句で王禹偁と欧陽修の都での活躍のさまを述べたのに対して、二人がそれぞれ知事として赴いた滁州で、その徳が滁州的の民に遍く及んだことを述べている。9〇君家一句 君家は、あなたの御家。一句では、王詔の家を指す。王詔の祖父の王化基（九四四—一〇一〇）は、参知政事を拝し、卒して右僕射を贈られていた。その子たちも、詔の伯父に当たる王挙正は、右諫議大夫、参知政事を拝し、太子少傅を以て致仕、卒して太子太保を贈られ、父の王挙元は、給事中、天章閣待制を拝している（詩題の注に引く『宋史』）。聯翩は、続いて絶えないさま。蘇軾「呂希道が和州に知たるを送る」詩（『蘇東坡詩集』第三冊五二頁）に「君が家 聯翩たり 三将相、富貴未だ已まず 今方に将いなり」とある。一

句は、王詔の家が、代々宰相を輩出してきた名門であることを称えている。10〇独来一句 坐嘯は、のんびりと座って詩を詠ずること。蘇軾「趙郎中和せらる。戯れに復た之に答う」詩（『蘇東坡詩集』第四冊一一七頁）の注を参照。溪山は、山水。19句に見える瑯琊山をはじめとする滁州の山水を指す。一句は、9句で王詔の家について述べたのに続いて、王詔自身について詠じている。112〇笑捐・多取二句 浮利は、浮つて実のない利得。『後漢書』逸民伝の序に、世俗にこだわり名声をあげようとする者に似た隠者を評して、「夫の智巧を飾り、以て浮利を逐う者に異なるか」とある。鶏肋は、にわとりのあばら骨。実際には大した意味はないが、捨てるには惜しいものの喩え。『蘇軾詩注解（十）』に収める作品番号一七五一の詩の注を参照。清名は、清廉高潔であるという評判。『晉書』河間王顥^{きんぎょう}伝に「少くして清名あり、財を軽んじて士を愛す」とある。熊掌は、熊の手のひら。希少で美味な食材であることに因んで、減多に得られない価値あるものを喩える。二句は、士たる者は浮ついた利得などに煩わされず、清廉高潔の名を大事にするべきであるという蘇軾の考えを述べている。蘇軾が、先人である歐陽修・王禹偁の事跡の中に見出しているものであり、それを王詔に向かって語りかけている。1314〇丈夫・両翁二句 『四河入海』卷一九の三に引く一韓智翹の聞書に「言（フコロ）ハ、永叔・元之ハ、其（ノ）身（ヲ）自重シテ、世間ノ小人ニコビテ、オヲテラウテ、之（ヲ）售（ラ）ズシテ、售（ラレ）難（キヨ）貴（ブ）ゾ。自（ラ）世間（ニ）容レラレザルヲ貴（ブ）也。サル程ニ、死シテ身後ノ名ハ、青山ト共（ニ）久（シク）伝（ハ）ルゾ」とある。二句は王禹偁と歐陽修が、自らを高く持し、世間に易々と受け入れられるようなへつらった生き方をせず、その清廉高潔な評判は、没後今に至るまで続き、いつまでも変わらないだろうと詠じる。1516〇後來・要伴二句 太守は、知事。後來太守は、今、滁州の知事である王詔を指す。前人は、先人。16句では、歐陽修・王禹偁を指す。作詩瘦は、詩作に身を捧げて瘦せっぱちになる。蘇軾「沈長官に次韻す 三首」その一（『蘇東坡詩集』第三冊三一八頁）の注を参照。二句は王禹偁と歐陽修の清名を称えた1314句を受けて、今、滁州に知事として在る王詔が、風流にかけてはかつての王禹偁や歐陽修に劣らず、詩作に身を削るさまを詠じる。『四河入海』に引く一韓智翹の聞書に「歐陽・元之両翁死シテヨリ、誰モツグ人ナカリシガ、此（ノ）王滁州コソ、更（ニ）風流ニシテ、永叔・元之ニ減ゼズシテアル程ニ、前人ノ如（ク）ニ詩（ヲ）作

ル瘦ヲ作サント要スルゾ」とある。17〇我倦一句 承明は、承明廬のこと。漢代、宮殿のそばに在って、近臣が宿直する所であった。蘇軾「錢藻が出でて婺州に守たるを送る、英の字を得たり」詩（『蘇東坡詩集』第二冊四八頁）の注を参照。一句は、蘇軾が都で天子側近として仕えることに倦んで、再三地方への転出を望んでいたが、やっとそれが叶って潁州知事として出ることができたことを述べる。18〇到处一句 六一は、六一居士。歐陽修の号の一つ。歐陽修は、致仕して後の晩年、六一居士と称した。「六一居士伝」（『歐陽文忠公文集』巻四四）に「六一居士 初め潁山に謫せられ、自ら醉翁と号す。既に老い衰えて且つ病んで、將に潁水の上に退休せんとすれば、則ち又た更に六一居士と号す」とある。潁州は、皇祐元年（一〇四九）、歐陽修が知事となつて赴いた地であり（廬陵歐陽文忠公年譜）、また「六一居士伝」に見えるように、退休して後の余生を過ごした地でもあり、歐陽修に所縁が深く、その足跡に富む。一句は、潁州に赴任した蘇軾が、六一居士歐陽修の足跡をあちこち尋ね歩いていることを述べる。1920〇憑君・許我二句 琅邪は、滁州の山。歐陽修「醉翁亭の記」（『歐陽文忠公文集』巻三九）に「滁を還りて皆な山なり。其の西南の諸峰林壑尤も美なり。之を望めば蔚然として深く秀でたる者は、琅琊なり」とある。歐陽修は滁州の山水をめぐって、「醉翁亭の記」「豊楽亭の記」や「琅琊山六題」等の詩文を著した。二句は、蘇軾が滁州を任地とする王詔に向かつて、あなたは潁州と同様に歐陽修に所縁の深い滁州の中でもとりわけ琅邪山を尋ねて、そして、そちらを訪れたがっている自分の気持ちをよろしく伝えてくださいと託している。

德行厚い、この人を何かに喩えるなら、春の雨のよう、農夫は心から喜んで迎えますが、旅人からは恨まれます。

ご覧なさい、歐陽修どのと王禹偁どのを。不遇で志を得ないまま生涯にわたって謂れのない誹りを被りました。両翁はまだ鬢髪に白いものが雜じりもしない壮年の頃に、翰林の玉堂で筆を持つ手も軽やかに見事な文章に腕をふるわれました。滁州の人々を教化して詩がわかるようにし、おかげで今でも州内の街じゅうで肥馬輕裘の贅沢などは軽んじられて嘲笑されます。

あなたの御家^{おうち}は大臣を輩出なさるお家柄というのに、あなただけは滁州の山川のほとりにのんびりと座って詩をものしておられます。はかない利得など取るに足りない一鶏肋^{けいりつ}、と笑って捨て置き、清廉高潔の名を多く収められるのは、熊掌をたくさん手に入れるのと同じことです。

士たる者、己れを金玉のごとくに重んじ、やすやすとは受け容れられぬ生き方を貴ぶもの、果たして欧陽・王両翁の名は今や滁州の青山とともに永に伝えられるものとなりました。後にこの地へ赴任して来られた知事どのたちもまた先人に負けず劣らずの風流人で、詩作に身を捧げて瘦せてしまおうとしておられます。

私は窮屈なお側仕えに倦んでしまい、何とか都を出たいと願っていましたが（それが実現し）、六一居士所縁^{ゆかり}の潁州で居士の足跡を訪ね歩いています。あなたは六一居士所縁^{ゆかり}の瑯琊山に尋ねてみてください、私めが遊びにやって来るのを厭わないでくださるかどうか、と。

（担当 原田直枝）

一八三六（施三一・二四）

趙景貺以詩求東齋榜銘昨日聞都下寄酒來戲和其韻求分一壺作潤筆也

趙景貺^{ちやうけいさう} 詩^しを以て東齋^{とうさい}の榜銘^{ぼうめい}を求む。昨日^{さくじつ} 都下^{とくか}より酒^{さけ}を寄^よせ来^きたると聞き、戯^{たわむ}れに其^その韻^{いん}に和^わす。一壺^{いつこ}を分^わかちて潤筆^{じゆんぴつ}と作^なさんことを求^{もと}むるなり

1 王孫天麒麟

王孫^{おうそん}は天^{てん}の麒麟^{きりん}

2 眸子奥而澈

眸子^{ほうし} 奥^{ふか}くして澈^{とお}

3 囊空學愈富

囊空^{のうくう}しくして学^{がく}愈^いいよ富^とみ

4 屋陋人更傑

屋陋^{おくろう}にして人更^{ひとさら}に傑^{けつ}なり

- 5 我老書益放 我れ老いて書益ます放いままなり
 6 筆落座爭掣 筆を落とせば座争つて掣く
 7 欲求東齋銘 東齋の銘を求めんと欲すれば
 8 要飲西湖雪 西湖の雪を飲ましめんことを要す
 9 長瓶分未到 長瓶分かつて未だ到らず
 10 小硯乾欲裂 小硯乾いて裂けんと欲す
 11 不似淳于髡 淳于髡が
 12 一石要燭滅 一石 燭滅ゆるを要するに似ず

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○趙景貺 趙令時のこと。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の注を参照。○東齋榜銘 榜銘は、文字を刻んだ木製の扁額。これにあたる文章は蘇軾の文集に現存しない。○都下寄酒來 都下は都のこと。ここでは汴京（開封）を指す。『世說新語』言語篇に「袁彦伯、謝安南の司馬と為り、都下の諸人送いて瀨郷に至る」とある。この詩の直後に作った「洞庭春色」詩（『合注』卷三四）にも同内容のことを書いている。○潤筆 書画の書き賃。揮毫料。『隋書』鄭詵伝によれば、隋の文帝が内史令の李德林に鄭詵の爵位を復する詔書を作れと命じたところ、冗談で「筆が乾いている」と言われた。鄭詵は、自分は高い地位まで出世したが一錢も得られなかったため、「筆を潤す」ことはできないと答えた。これがもとで「潤筆」は文章や書画創作の報酬をいうようになった。

1 ○王孫一句 王孫は、王の子孫の意で、ここでは天子の一族である趙令時をさす。『春秋左氏伝』哀公十六年に「王孫若し楚国を安靖し、王室を匡正して、而る後に庇わば、啓（楚の平王の子の名）の願いなり」とある。麒麟は、想像上の仁獸（仁徳を具えた獸）。『礼記』礼運篇に「鳳皇麒麟、皆な郊禰に在り」（郊禰は、郊野）とある。天麒麟は、

天上の麒麟、優れた人物をととえる。「席上 人に代って別れに贈る」詩その二の注『蘇東坡詩集』第二冊五六六頁）を参照。2〇眸子一句 眸子は、ひとみ、瞳子。『孟子』離婁上篇に「人に存する者は、眸子より良きは莫し」とある。澈は、水が澄む、きよい。3〇囊空 囊は、ふくろ、ここでは財布のこと。杜甫「空囊」詩（『杜詩詳注』巻八）に「囊空しくば恐らくは羞澁ならむ、一銭を留め得て看る」とある。4〇傑 ずば抜けて優れているさま。56〇我老・筆落二句 放は、気ままなこと。掣は、ひく、ひっぱる。『管書』王猷之伝に、「（王猷之）七、八歳の時、書を学ぶ。（王）羲之密かに後従り其の筆を掣けども得ず。嘆じて曰く、「此の児 後に当に復た大名有るべし」とある。宋・王辟之『渢水燕談錄』巻四には、蘇軾の書画は絶品であるため、その作品は書かれるそばから人の所蔵品になる旨の記述がある。8〇西湖雪 西湖は、潁州の西湖を指す。ここでは西湖の雪の如くに清らかな上質の酒をたとえる。1112〇不似・一石二句 淳于髡は戦国・斉の人。博識で多弁、滑稽の才があり、斉の威王に仕えた。『史記』滑稽列伝によれば、淳于髡は威王に酒量を聞かれ、自分は一斗を飲んで酔う場合もあれば、一石を飲んで酔う場合もあると答えた。さらにその理由を聞かれると、「日暮れ酒闌にして、尊（酒器）を合わせ坐を促めて、男女席を同じゅうし、履舄交錯し、杯盤狼藉として、堂上に燭滅す。主人 髡を留めて客を送らん。羅襦襟解け、微かに薌沢を聞く。此の時に当たって、髡の心最も飲び、能く一石を飲まん」と答えた。「李公枌 傅国博の家に飲み、大酔するを聞く二首」その一の注（『蘇東坡詩集』第四冊五一頁）を参照。

あなたは王家の子孫で、天上の麒麟のような存在、その瞳は深く澄んでいる。財布が空であればあるほど学識はさらに豊かになり、住まいが狭苦しいほど人柄はいっそう抜きん出る。

私は老いるにつれて筆勢がますます奔放になり、ひとたび筆をおろすや、たちまちにその場の人々が奪い合う。あなたが私に東斎に掲げる扁額の揮毫をねだるのなら、その代償に西湖の雪の如き美酒を飲ませないといけませんよ。

大瓶にいっぱい酒はまだ分けてもらえないので、小さな硯が乾いて裂けてしまいそうだ（だから早く酒を

送ってください）。こちらはあの淳于髡とは違って、酒宴の蠟燭が消えてからまでむちゃ飲みをするわけでもないですよ。

（担当 蔡 毅）